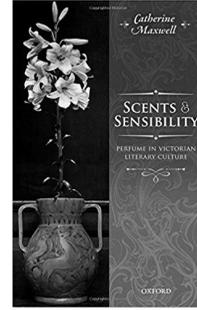


書 評

Catherine Maxwell, *Scents and Sensibility: Perfume in Victorian Literary Culture* (Oxford: Oxford University Press, 2017)

庄子 ひとみ



本書はロンドン大学クイーン・メアリの演劇・英文学科で教鞭をとるキャサリン・マクスウェル (Catherine Maxwell) が唯美主義を中心としたヴィクトリア朝文学作品を人間の嗅覚と芳香をキーワードに論じた研究書である。ウォルター・ペイター、オスカー・ワイルド、ラフカディオ・ハーンのように既に著名な人物のみならず、文学史で必ず言及されていると言い難い詩人や作品も積極的に取り上げており、英文学研究書としては勿論のこと貴重な資料やカラー図版が多数収録された香りの文化史としても非常に有用な一冊と言える。

アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909) をはじめとしたヴィクトリア朝後期の唯美主義作品研究で知られるマクスウェルだが、彼女の初期の論考、例えば世紀末の文学作品とジェイムズ・アボット・マクニール・ホイッスラー (James Abbott McNeill Whistler, 1834-1903) の絵画におけるヴェネツィア表象を比較分析した ‘Whistlerian Impressionism and the Venetian Variations of Vernon Lee, John Addington Symonds, and Arthur Symonds’ (2010)¹ に代表されるように縦横無尽に文学テキストとイメージの相関性を論じる姿勢は本書においても健在で、作品が生まれた時代やその空間を構成する人々の息遣いにさえ耳をすますような繊細な知覚と想像力を各章で発揮している。奇しくもロンドンのサマセット・ハウスで2017年夏に開催された芳香がテーマの *Perfume: A Sensory Journey Through Contemporary Scent* (2017年6月21日~9月23日) の展示とマクスウェルの *Scents and Sensibility* 出版は時を同じくしているのだが、どちらも人間の嗅覚が呼び起こす記憶や感情を言語化し、嗅覚が喚起

する文学性に焦点を当てた試みという点で共通している。サマセット・ハウスの展示では来場者は入り口で白紙のノートを渡され、商品としての香水あるいは調香師の名前といった情報を事前に与えられないまま異なる香りの漂う部屋を通過し、頭に浮かんだ言葉に変換してみる作業を求められた。例えば、白いカーテンが風に揺れている部屋に漂う香りに集中していると筆者の場合「秋の雨の日の通学路」のイメージが浮かんだが、それらは断片的であっても言語化しメモに残すようにスタッフから促される。懐かしいような湿気を帯びた香りの正体は、苔や朽ちた木であったり、華やかな香りの官能性を高めていた成分が実は動物の分泌液だったり。単独では悪臭と分類される臭いも調香師によって複数が混ぜ合わされ、香水として調合された途端に予想もしなかった花のような芳香を放つ。人間の嗅覚の複雑性を改めて認識し、体感させてくれる展示だが、マクスウェルの *Scents and Sensibility* も同様に序章 ‘Top Notes: Victorian Perfume Contexts’ 及び各章において嗅覚の複雑性について繰り返し言及し、生活臭や体臭も含めたヴィクトリア朝の人々が暮らしていた空間の「臭い」と人為的な「芳香」の関わり方を紹介しながら、個々の文学作品の香りの表象について論じている。

19世紀のヨーロッパでは科学の発展に伴い、高価な天然香料に替わる合成香料が盛んに製造された。チュベローズやヘリオトロープ、ライラックと言った植物の香りだけではなく、東方からもたらされる希少な動物由来の麝香 (Musk) でさえ、合成香料として安価に製造され、その香りを再現できるようになった。ニュー・ボンド・ストリートの香水商ピース・アンド・リュバン (Piesse and Lubin) に代表される工夫を凝らした商品広告の効果も手伝って、新しい香水の顧客層は急速に拡大され、かつては特権階級のみが纏うことができた香りは、顧客となる紳士の関心を効果的に引こうとする娼婦やミュージックホールの踊り子の定番となる。かくして香りが伝達するイメージは新しく書き換えられ、文学作品においても香りが伝えるメッセージ性は複雑に変化していく。例えば2章では、控えめな乙女が纏う香りの代表格とされていたスマイレ (Violet) の文学作品における記憶と死のイメージ形成について、ウィリアム・シェイクスピアからパーシー・ビッシュ・シェリー、ジョン・キーツを経てキャサリン・ブラッドリー

(Katherine Bradley, 1846–1914)に至る系譜を見出している。一方、5章では植物性の香りとしてはスマイレの対極にある、官能的で人を惑わすとされるチュベローズ (Tuberose) が文学的流行としてのデカダンスとどのような関わりを持っていたのか、ヴィクトリア朝後期の詩人マルク＝アンドレ・ラファロヴィチ (Marc-André Raffalovich, 1864–1934) や テオドール・ラティスロー (Theodore Wratislaw, 1871–1933) らの作品を手がかりに論じている。

読み進めるにつれて、ヴィクトリア朝における自然と科学の闘ぎ合いの構造を如実に表している現象の一つとして、合成香料の発展と普及があることがわかる。どの章も単独の香りに対し複数の作家や詩人を取り上げて比較分析するスタイルを採用しているが、7章 'Dandies and Decadents: Oscar Wilde and Arthur Symons' では世紀末のデカダントとしてワイルドとアーサー・シモンズ (Arthur Symons, 1865–1945) の作品を中心に香水の役割について論じている。ワイルドの *The Picture of Dorian Gray* (1890) における男性が纏う香りは、人工的に調合された香水を選び共有する者同士の秘められた同性愛を示唆しているが、同時代の同性愛の描写でもジョン・アディントン・シモンズ (John Addington Symonds, 1840–1893) が大自然の香気を比喩的に用いて健康的かつ開放的に同性愛礼賛をしている点とは対照的であるという指摘は興味深い。ワイルドと同様に、最先端の技術によって人工的に調合された香水の愛用者でもあったアーサー・シモンズの詩では、詩人の目の前から去ってしまった女性が部屋に残した髪の毛の匂いや香水が混じり合った香気を思い出す描写が匿名の女性の正体と詩人の官能的な関係を暗示している。当時の上品な女性なら避けるであろう香りを纏った女性、娼婦がミュージックホールの踊り子との秘密めいた逢瀬があったことは容易に想像でき、体臭と人工的に作られた香料が混じり合うことで醸し出される香りは、その場を既に離れた人物の記憶を蘇らせ、目には見えない余韻を空間に残す。ワイルドとシモンズは人工的に作られた香りを作品中に多用しただけではなく自身も私生活で愛用した点で共通している。複数の香りが組み合わせられることで可能な周囲への不可視な影響力に注目して積極的に活用した詩人とは、マクスウェルが指摘しているように「調香師であり、現実のような幻を見せてくれる幻影師でもある」(269)。

人間の知覚の中でもおそらく最も重要ではない感覚である嗅覚の喜びに

人は魅了されてきた。そして目には見えない香りの効果を言葉で伝えようとした詩人や作家たちは作品世界に独特のニュアンスをもたらす手段として香りを積極的に採用してきた。香りは単にその空間のムードや雰囲気貢献するだけではなく、当時の香水の流行の変遷から、人物の個性やアイデンティティを伝える貴重な役割をも担っていたことは明らかで、洗練された嗅覚と香りの知識を持つ教養人 (*olfactif*) として自負している詩人や批評家に焦点を当てている本書は興味深い例に溢れている。野に咲く可憐な鈴蘭 (*Lily of the Valley*) は香水として完成させたくても、全く異なる合成香料を複数調合しなければ天然の香りを再現できないというパラドックスに、嗅ぎタバコや石鹸、アロマティック・ジュエリーに代表される洗練された嗅覚を誇示したい人々が愛用した小物の役割。香りに纏わるエピソード、当時の香水商の広告や香料の材料となる植物のカラー図版等も充実しており、英文学のみならず服飾・装飾文化に関心がある向きにも魅力的な内容となっている。中心として取り上げられているのは世紀末唯美主義者と分類される作家や詩人たちではあるが、彼らの私生活と作品中での香りの描写にスポットを当て、ペイター、ジョリス＝カルル・ユイスマンス (*Joris-Karl Huysmans, 1848-1907*) からヴァージニア・ウルフに至る20世紀のモダニズム文学の発展へとリンクさせている。上質な文学散歩をしながら香りの文化研究書としても非常に有用な一冊である本書は、文学作品に描かれた様々な香りを目で追いながら、読者に芳香さえ届けてくれそうな再現性を可能にしている。

注

- 1 Catherine Maxwell, 'Whistlerian Impressionism and the Venetian Variations of Vernon Lee, John Addington Symonds, and Arthur Symonds', *The Yearbook of English Studies*, Vol. 40, No. 1/2, *THE ARTS IN VICTORIAN LITERATURE* (2010), pp. 217-245.

— 順天堂大学助教